緋弾のアリア　～死に生を与える者～

勇者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア　～死に生を与える者～

【Ｎコード】
Ｎ２４０４ＢＡ

【作者名】
勇者

【あらすじ】
目が覚めると真っ白な空間のなかにいた前田　響は出てきた美少女によって緋弾のアリアの世界に転生させられる。そして、死んだ者に生を与える能力を持つ、それがきっかけで二つ名はネクロマンサー、アリア達と楽しくやっていく

主人公紹介

名前　前田　響

学科　ＳＳＲ

能力　蘇生、一分に１０回死なないとは死なない、投影、瞬間記憶

性格　最近のよく切れる若者　　よくサボる

好きなもの　甘い物

嫌いな物　アリア、敵対するやつ

詳細　今のところはなし

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

字数稼ぎです

転生

「あれ？ここどこだ？」

俺は今、真っ白な空間のなかにいる

「確か俺は……あれ？思い出せない……どうなってんだ？」

そんなことを考えていたら俺の前に美少女が出てきた

「ん？どっから沸いてきたんだよ」

「私はゴキブリじゃない！！」

そう言って頭を叩いてきた。あ、思い出した。俺の名前は前田　響（まえだきょう）だったんだ

「まあそんなのどうでもいいけど…君迷子？残念だけど、俺も迷子だから……」

「私は迷子じゃないよ！！君を助けにきたんだよ！」

「助ける？どういう意味？」

「そのままの意味だよ。君が私の手違いで死んじゃったから私が行き返してあげるんだよ」

「それは助けるじゃなくてお詫びじゃないの？まあそんなのどうで

もいいけど……じゃあ早く元の世界に戻してよ」

「あ、それは無理。だって元の世界では今火葬中だから……だから適当な世界に飛ばす」

「……は？え、ちょっと待て。適当な世界に飛ばす？それだったら死んだ方がいい」

「そういう訳にもいかないんだよ。だってミスっちゃったったことがお父様にばれたら面倒なんだもん」

「もういい、わかったからさっさと飛ばしてくれ。君といたら頭が悪くなりそうだよ」

「む、失礼な。あの、申しにくいんだけど……転生するはいいんだけど、そこが物騒な世界なの」

「……は？おまえはバカなのか？誰がそんなとこに行くか、他にしろ」

「そこにしか飛ばせないんだよ。だから転生特典として３つぐらいねがいを叶えてあげる」

「ねがいを叶える？おまえはバカなのか？」

「バカじゃない！私は神様だからできるの」

「じゃあ元の世界に戻してください」

「それ以外で」

「いっそのこと殺してくれ」

「だからそれやっちゃダメなんだって」

「せめてそこがどんな世界なのか教えてくれ」

「君の世界にもあると思うけど緋弾のアリアの世界だよ」

「ああ、なんだ友達が勧めてきたラブコメか。あれ読まなかったんだよな」

「あれはラブコメじゃないよ。あれ、れっきとしたガンアクションとかだったと思うよ」

「じゃあそこに行くんなら…あれだ……えーと、そう！武器よこせ」

「え！？それが出てこなかったの！？まあ渡すけど。あ、　これは願いにカウントしなくていいから」

「え、マジで？やった。後は……死んだやつを生き返らせる能力。あ、これはさじ加減次第でゾンビにできる設定で」

「わかった。今やった。で、後二つは？」

「絶対的な実力で」

「あ、それは無理。潜在能力をすべて引き出すのはできるけど」

「ちなみに潜在能力をすべて引き出すとどれくらい強いの？」

「人間の潜在能力はすごいよ君のは特に優れているから……足技だけでゴジラを殺せるくらいかな」

「……人間ってめちゃくちゃだな」

「まあ、人間って実力の何割も出してないって言うしね」

「じゃあそれでいい。後、俺は一分以内に十回死なないと死ねないとかどうかな？もちろん不老」

「……君はよくそんなこと思い浮かぶよね普通は不老不死だろ」

「そうか？不老不死だと死ねないからきっと辛いぞ」

「なるほど。まあ、これで終わりと言いたいところだけど、君は気に入ってしまったから、特別に私の未来の夫にしてあげる」

「いらない、そんなのもらうんだっら金を貰う」

「ケチ、そういえばお金ないしあげるよ」

「やった。ってこれめちゃくちゃ入ってるじゃないか」

「そりゃまあ私の未来の夫のために全財産あげてもおかしくないでしょ」

「ふーん、どうやったら2億って単位がたまんだよ」

「宝くじ。まあそろそろ送るから、響君あなたは転校生として東京武偵高に行くことになってるから」

「わかったけど武器は？」

「君が想像したら想像した通りの武器が出てくるよ」

「そんなの頼んでないけどなまあ、ありがとう」

「行ってらっしゃい、ダーリン」

「誰がダーリンだ！？」

「そこは行ってらっしゃいハニーでしょ」

「知らん早く飛ばせ」

「バイバイ」

美少女がそう言うと目の前が真っ暗になった

出会い（前書き）

更新ペースが遅いですね

出会い

「……えーと、確か俺神様に手違いで死んじゃったから、転生されたんだよな。ここどこだ？ってか、本当に想像した通りの武器が出てくるのかね～ちょっとやってみるか」

元の世界の実家にあったでかい刀、確か太刀？を想像してみた

「うおっ、本当に出てきたし。切れるのかな？地面でも切ろうかな」

地面に切りつけるときれいに切れた

「切れ味いいな。この刀どうやって消すんだろ。想像すれば消えるかな」

あら不思議、あっという間に消えちゃった

「おお、確認できたし、ここがどこか人に聞いてみるか……って人がいないし。確か俺は東京武偵高に行くことになってるんだよな。東京武偵高って高校か？ダッサイ名前だな」

ん？人影が見えるぞ

「おーい、東京武偵高ってどこか知ってるか？」

「危ないからどけー！」

どいたらすごいスピードで自転車が通っていった。正確には今年のガキ使に使われたセグウェイってやつも通っていった。でもガキ使

とは違って、地デジカではなくマシンガンみたいなのが乗っていた。
爆弾がどうのこうのって言って
「ちょっ、東京武偵高ってどこにあるんだよ！」
俺は全力で走って自転車を追いかけたつもりだったが
「あれ？自転車が後ろに見えるぞ？俺の錯覚かな？」
錯覚ではなかった。自転車とセグウェイを抜かしてしまった。自転車に乗ってるやつ驚いてるぞ
「おい来るな！この自転車には爆弾が仕掛けられている！」
ん？俺に驚いてないな、俺の先を見てやがる
「うわっ、美少女かパラグライダーで降りてきやがるし」
「そっちの走ってるあんた！どきなさい邪魔よ！」
「そうだよな。どいた方がいいよな。だから銃を撃たないで！」
「あんたに向かっては撃たないわよ！あっちのＵＳＩに撃つのよ」
「ＵＳＩ？なんだそれ？って危ねっ」
パラグライダーを避けると美少女が銃をセグウェイの上に乗っているマシンガンみたいなのに撃った。そしてそのまま自転車に乗ってるやつを抱いてどっかに行った。

「東京武偵高ってどこにあるか教えてくれよぉぉぉ」

ドシャーン、叫ぶと同時に自転車が爆発して俺も巻き込まれて死んでしまった

「痛っ、死なないとはいえ死の痛みはすごく痛いな」

ただいま喋れるけど手足再生中のため動けない

「いやー、酷いものだな。本当に物騒な世界なんだな。こんなとこに飛ばすなよ。きっと俺のご先祖様が可哀想だって泣いてるぜ」

「ちなみに元の世界では前田　利家という人の子孫なんだよ」

「おっ体が動くようになったな。東京武偵高がどこにあるか聞きにさっきの不幸少年と美少女の飛んでったところに行こうかな」

全力で走って落ちていったと思われる場所へ行った

……

「た、助けてぇぇぇ、死ぬぅぅぅ、あ、今死んだ助けてぇぇぇマジで死ぬぅぅぅ」

なぜこうなったんだよ説明してくれ！まわり俺しかいねぇし

「ヤバイよヤバイよぉ。死んじゃうぞ早く一分たたないと死んじゃ

うぞ俺。助けてぇぇぇ」

叫んでもなにも来ないから回想してみよう。誰だ今走馬灯って言ったやつ。出てこい射殺してやる！

……

「えーと、確かあっち方面に行ってたな」

ただいま、ボ〇トさんを越える速さで走っています

「ん？さっきと同じセグウェイじゃないか。物騒過ぎるだろ。この世界、あんなの道にあるんだったら一生家にいるわ！」

太刀を想像して作り上げた。今頃だけどあれだな、この能力ってｆ〇ｔｅ　ｓｔａｙｎｉｇｈｔに出てくる衛宮士郎の投影だなマジで

「ていっ、ほう、やっ」

前にあったセグウェイに乗ってるマシンガンみたいなのを切った。すると、残りのやつがすべて俺に銃口を向けた

「え、ちょっ、マジで？やったらダメだった？に、逃げろ」

そうして追いかけられるようになった

……

「ん？建物がある！とりあえず逃げ込もう」
全力で走り続け、やっとかくれれた。今、戦えよとか言ったやつ。
俺は戦いながら来たぞ一応
「うわっ変態だ！こっちも危険だ」
目の前にさっきの美少女が自転車に乗ってるやつに抱かれていた。
「違う俺は変態なんかじゃない」
「知ってるかお前、少女の反応から言うと同意じゃないだろ。ってことは強制猥褻だ」
「とりあえずあのおもちゃを破壊しないとね」
変態不幸少年がセグウェイの方向へ向かい銃弾をすべて避けた
「うわっ強すぎるだろこいつも潜在能力をすべて引き出してるんじゃねえか」
「こいつもって何よ」
「何よってなんだよ。お前は黙っててくれたらありがたい。いや黙ってくれ」
「あんたいきなり来て何言ってんのよ！名前を言いなさい！」

「田中太郎だ」

「嘘よそんなどこにでもいそうな名前なんてそんなにいなわ！」

「今のその発言全国にいる田中太郎さんに謝れ！そして東京武偵高がどこにあるか教えて死ね」

「はあ？もう頭にきた。風穴開けてやる！」

「1回ぐらい開けられても別に死なないしいいよ。だが、撃たれたら遠慮なく額に穴を開けてゾンビにしてやる」

「ゾンビ？そんなのできるわけないじゃない頭おかしいんじゃないの？それに見たところ何も装備してないのにどうやって穴？開けんのよ」

「あ、俺も頭にきた。殺すっ！」

自分でも驚くぐらい殺気を出し、手をポケットにいれて想像して以前興味本意で調べた最強の拳銃、パイファー・ツェリスカを取り出した

「待つんだ。君が話しているのを聞こえてしまったけど、武偵高転校してきたんだろ。じゃあ殺したらダメだし、女の子には優しくしないといけないよ。しかももう遅刻だから、俺と一緒に行こう」

手を押さえられながら言われた

「あ、そうだった。武偵高へ行かなきゃならないんだった。じゃあ

行くか。案内してくれ」

パイファー・ツェリスカをポケットに入れて消してから殺気も消した

「待ちなさいそっちの強猥魔あんたは逮捕するっ！」

「アリア、あれは不慮の事故だよ」

「早く行こうぜ。転校初日が大切だろ」

「ちょっと待ってくれ」

そういった後、なぜか変態不幸少年とイライラするやつが戦闘になった

「うわっ、圧倒的だな。しかし子供相手に大人げないな」

あ、今イライラするやつがこけた

「さて早く行こうか」

「やっとか」

変態不幸少年の足の速さに会わせてその場から去っていった

……

これがいずれ『蘇生者（ネクロマンサー）』と呼ばれることになる俺と『双剣双銃（カドラ）』と呼ばれている神崎・Ｈ・アリアとＨＳＳを持つ遠山キンジの出会い

だった

出会い（後書き）

うーん、いつ主人公紹介しようかな

転校

「なあ、変態不幸少年、武偵ってのはなんなんだ？」

俺と変態不幸少年は今始業式に出ていた

「変態じゃないし俺は遠山キンジだ。お前は武偵が何かも知らないで転校してきたのか？お前バカだろ」

「俺はバカじゃない天才だ以後気をつけろじゃないと殺す」

「だから武偵は人を殺したらダメなんだって」

「わかった殺さないよ多分」

「多分じゃダメだ。ってか普通は殺したらダメだろ」

「大丈夫だ死んだら生き返らせる」

「死んだら生き返らねえよ絶対に」

できるんだよなぁ俺には

「そうだな。ってか校長の話長いな」

「それはどこも同じだろ。お前の元いた学校だってそうだっただろ」

「さあどうだったかな。忘れてしまったな」

「ふーん、そういうものか」

「そういうもんだ。お、話終わったな」

「お前は手続きしないといけないだろ」

「お前ってのはやめてくれ。響さんか響と呼べ」

「じゃあ、響は今から教務科（マスターズ）に行かないとダメなんだろ？」

「そうだな。キンジ、一緒のクラスになれたらいいな」

「ああ、そうだな。教務科は危険だから気をつけろよ」

「んじゃ行ってくるわ」

キンジと俺はそう言って別れた

……

「あなたが前田　響君ね。私は2年A組の担任の高天原ゆとりです。後一人転校生が来るのだけど前田君知らない？」

「俺が知ってると思いますか？ここに来て知った人は遠山キンジと後アリアとか呼ばれてた人だけですよ」

「アリアさんって神崎・H・アリア？」

「知りません」

「すみません遅れました」

アニメ声をしてちっちゃいピンクのツインテールが入ってきた

「神崎さん、次からはあまり遅刻しないようにね」

先生が言ったけど神崎は俺を見てなにか言いたそうだ

「なんだ神崎、言いたいことがあるなら言え」

「あんたさっきはよくもやったわね」

「で、なんだ。終わりか？」

「はいはい、そこまでです。時間ですからそろそろ行きますよ」

高天原先生が歩いていった

「はい、わかりました行きましょう」

俺がついて行った

「待ちなさい！」

神崎もついてきた

……

「今日は転校生が二人います」
高天原先生が喋っている。俺と神崎は廊下で立っている
「二人とも入ってきて」
俺と神崎は入った
「前田君から自己紹介して」
「前田　響ですよろしくお願いします」
俺は前にいる生徒たちを見渡した。
……あ、キンジ発見
「キンジこれ」
神崎がベルトをキンジに投げた
「理子分かっちゃった。これフラグたってるよ」
うーん、ここの第一印象は騒がしいだな
タァンタァン
神崎が銃で壁を撃った
「恋愛なんてくっだらないーーーーーー」

あ、このセリフは友達が女性にフラレた後にその瞬間を見ていた俺に言った言葉だな

にしても神崎が言うと友達なんかより納得できるな

「俺の席は適当でいいです。できれば神崎とは離してください」

「何言ってんのよ。私の話聞いてなかったの？あんたは私の隣よ」

「……はあ、もういい」

俺は席についた

……

なんやかんやで昼休みになった

「はあ、マジで疲れた。学科って何だよ何種類あるんだよ」

キンジに愚痴った

「確か１０個ぐらいだろ」

「違うわ！１４個だよ教務科合わせて１５個」

「知ってるのかよ」

「当たり前だ。俺には瞬間記憶という能力が備わっていたんだよ。一度聞いたり見たりしたら覚えてしまうんだよ」

「スゴいな」

「そういえばキンジは学科何なんだ？」

「探偵科（インケスタ）だよ」

「ふーん、じゃあ俺はＳＳＲか救護科（アンビュランス）か強襲科（アサルト）にしようかな」

「何で俺に聞いたんだよ」

「何となくだ」

キーンコーンカーンコーン

「お、午後の時間だな。俺は教務科に行かないといけないからまたな」

そう言って俺はキンジと別れた

ドレイ宣告まあそんなのどうでもいいけど

今俺は教務科にいる。理由？それは前にいったろ。呼ばれてたからだ

「学科はＳＳＲ　って言ったじゃないですか」

「だから、見せてくれないといけないんですよ」

「言ったじゃないですか。人を生き返らせるっていう能力だって」

「そんなのは信じられません。人を生き返らせるなんて不可能です」

「もういいです。じゃあ違う能力を使います」

そう言って俺は刀を投影した

「これでどうですか」

「はいわかりました。他にありますか？」

「不老と一分以内に１０回死なないと死ねない能力です」

「じゃあ死んでみてくれますか？」

「え！？あんたは本当に先生かよ。まあいいです」

投影した刀で首を切った。俺の頭がしたに落ちた

「あの先生頭をくっつけてくれませんか？体を動かすのが難しいん

ですよ」

すると先生は頭を首の上にのせてくれた

「後は人を生き返らせる能力、そうですね『蘇生』と言っておきましょう。それだけです」

「わかりました。学科はＳＳＲでいいんですね」

「はい」

「前田君はＳランクですもし『蘇生』が本当であればＲランクです」

「ふーん、そういえば合宿というものがあるんですよね」

「ありますよ」

「それ、サボります」

「ダメですちゃんといってください」

「はいはい、じゃあさよなら」

「待ってください。まだ強襲科や狙撃科などの試験を受けてください」

「……何すればいいんですか？」

「そうですね、狙撃科は狙って撃つだけでいいですけど強襲科は誰かと近接格闘（アル＝カタ）をしてもらいます」

「じゃあ近接格闘の方は面倒だから明日でいいですか？」

「休息は必要ですしね。いいですよ」

「じゃあさっさと狙撃科の試験をやりませんか」

「わかりました。では行きましょう」

そうして狙撃科の試験を受けた

……

「あなたは本当に一般高からきたんですか？全弾同じ場所に当てるなんて……」

「細かい事はほっといてください」

「狙撃科はSランクです。では今日は帰っていいですよ」

「俺ってどこに帰ればいいんですか？」

「忘れてました。えーと、遠山君と仲良かったですよね？だから遠山君と同じ部屋でいいですか？」

「いいですよ」

そうして寮に向かった

……

「……」

今俺は目の前のちっこいのを見ている。一応言っておくがロリコンではないぞ。うん、あちらは気づいていないようだな……俺は先生に教えてもらった部屋に行ったつもりなんだけどな。でもやつはその部屋のチャイムを連打している

「誰だようるさいな！」

キンジが出てきた

「遅い！次からは三秒以内に出なさい！」

「ん？あ、響じゃないか」

キンジが俺に気づいたようだ

「響？ちょうどいいわあんたも来なさい」

神崎も俺に気づいたようだ

「まあそこが俺の部屋らしいからな。行く以外に選択肢はないな」

俺はキンジの部屋に入った

「おじゃまします。まあこれからは俺も使うんだけどな」

「ってことは響がルームメイトになるのか」

「そんなことどうでもいいけどトイレどこ？あとカバン中に入れときなさい」

「キンジ、このカバン捨てようぜ」

「そんなことやったら風穴開けられるだろ」

キンジが中にいれはじめた

いれ終わったら神崎がトイレから出てきて俺たちの前に来て

「あんたたち私のドレイになりなさい」

「死ね」

俺がいうがもうご主人様気取りの神崎は俺を無視してルンゴだかなんだか言った。実際言おうと思えば言えるが面倒だから言わない

キンジがインスタントコーヒーを持っていった

「ドレイってなんだよ」

キンジが言った

「キンジ、俺は面倒だから寝るわ。おやすみ」

「響、待ってくれ」

俺はソファーに寝そべって明日どうなっているか予想しながら寝た

……

「何でこうなってんの」

俺は起きると目の前にアリアがいた

「いや俺にもわからない」

キンジがわからないとなるともう心当たりがない

「お前はなんでここにいるんだよ」

「あんたたちが強襲科に入らないっていうからよ」

「入らないって言ったからここにいるのか？バカだろ」

「私はバカじゃない。バカ！」

「おまえよりは賢い。だが決めた今日の強襲科の試験の近接格闘はおまえをぼこぼこにしてやる」

「私はSランクよあんたなんかに負けないわ」

「はっ、言ってろ。おまえをぼこぼこにしてやる」

それから俺は部屋から出ていった

……

あっという間に午後の試験の時間になった

「先生、俺、神崎と近接格闘します」

今日は蘭豹という先生が見てくれるらしい

「おう、殺れ殺れ。神崎来い」

今漢字が……

「はいなんでしょうか」

「おまえ、前田と近接格闘しろ」

「この時を待ってたわよ」

「早くC装備に着替えろ」

「何ですか？それ」

「あんた、C装備を知らないの？」

くっ、こいつにバカにされるとは一生の不覚

「俺はそんなの必要ないんだよ。どうせ当たらないから」

「じゃあさっさと始めろ」

蘭豹が言ったあと移動した

決戦　まあただの戦闘

「早く始めようぜ」

俺が言うが

「うるさいわね。その前に私が勝ったらドレイになりなさい」

まだそんなこと言ってやがるのか

「いいよ。どうせ負けないから。俺が勝ったら逆立ちで校庭三周だ」

「じゃあ二人とも思う存分殺しあえ」

蘭豹がそう言って銃を撃った。それが合図だったらしく神崎が撃ってきた

「いきなりか」

俺は銃弾を避けて太刀を投影して斬りかかる

避けられて至近距離で発砲される。それを避けて斬るそれを繰り返した

「銃弾ってこんなに遅いもんなんだな。しかもおまえは思っているほど強くないし」

「あんたの事を見くびっていただけよ」

神崎はそう言ってもう一丁銃を取り出して撃ってきた。
まあそれも避けれるけど

「おまえにはもう武器は使わねぇわ」

そう言って武器を捨てた
身体能力がどれくらいか知りたいしな

「私をなめてるの？後悔しても知らないわよ」

「なめてるよ。だっておまえ弱いし…どうせ銃弾なんて俺にはあたらねえ」

「もう怒ったわ」

銃を片付けて刀を二本取り出しやがった

「無理だって俺の速さにはついてこれない」

跳躍して神崎の腹を潰さない程度に蹴った
結果、めちゃくちゃ飛んでいった

「うわっ、やり過ぎたかな」

「前田、今なにやったんや？見えやんかったで」

蘭豹が言ってきた

「普通に跳躍して蹴っただけですよ。ちゃんと手加減はしました。
だから力の１割も出してませんよ」

「もう十分や強襲科(アサルト)はSランクや」

「はいわかりました。で、あそこで気絶してるのはどうすればいいですか？」

「ほっとけば起きるやろ。おまえ試験すべて終わったからもうSSRにいってええで」

「今日は帰ります。そして寝ます」

「待ちなさい！まだ勝負はついてないわ！」

「もう十分だろ。これ以上するとおまえは死ぬそれでもいいんだったらやってやる」

「うるさい！」

そんなこと言って撃ってきた

それを避けてまた跳躍して蹴った今度は本気で、すると神崎は上半身と下半身で真っ二つになってしまった

「前田、おまえ、本当に殺したらあかんやろ」

蘭豹が俺に殺気と銃を向けながら言ってきた

「ちょうどよかったんですよ。俺には本当に人を生き返らせる能力があるっていうのも見て貰えますし。だからそんなに殺気を出さないでください怖くて先生まで殺しちゃいそうですよ。まあ、見ててください」

そう言って俺は神崎の上半身と下半身の間に手を置いて念じた
すると、神崎の上半身と下半身がくっついてきた。しまいには息も取り戻した

「どうですか？これが俺の能力の１つ『蘇生』です」

「おまえはなにもんや？」

「俺は何者でもありません。俺は俺、前田　響です。それでは帰ります」

帰っていった。幸いなことにギャラリーは蘭豹一人だけだったからこの能力はあまり知れ渡らないと思う

……

「で、なんでおまえがまたここに来るんだ？」

今俺の目の前にいるのは神崎だった

「あんたは後回しにしてキンジを私のドレイにするためよ」

俺はこいつを殺したのに俺を恐れてはいないということはおそらく記憶がないのだろう

「だってよキンジ、強襲科に戻るだけ戻ってくれ頼むから」

「そうよキンジ強襲科に戻りなさい！」

「わかった。ただし（ｒｙ」

「どんなに（ｒｙ」

「二人とも頑張れよ」

「何言ってんのよ。あんたもよ別に強襲科に戻らなくてもいいけど事件には協力してもらうわ」

「もうわかったから早くここから出ていってくれ」

そうして神崎を帰らせることに成功した

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2404ba/

緋弾のアリア　～死に生を与える者～

2012年1月12日00時58分発行